

第65回

東北・北海道地区大学等 高等・共通教育研究会

日時 平成27年 8月27日(木)・28日(金)

会場 山形大学 小白川キャンパス(当番校)

主催 東北・北海道地区大学等
高等・共通教育研究会



交通案内



会場周辺



各地



第65回東北・北海道地区大学等 高等・共通教育研究会 実施要項

第65回東北・北海道地区大学等高等・共通教育研究会
 委員長(山形大学長) 小山 清人
 連絡先: ☎990-8560 山形県山形市小白川町1-4-12
 山形大学小白川キャンパス事務部教務課教育企画担当
 TEL/FAX: 023-628-4720
 E-mail: k3cen@jm.kj.yamagata-u.ac.jp

目次

全体テーマ「魅力的な学士課程教育の構築に向けて」	1
総会Ⅰ	2
全体会Ⅰ 基調講演「公開・共有・相互研鑽による大学教育改革 ―改革もローマも一日にして成らず―」	3
分科会テーマ	5
第1分科会テーマ「アクティブラーニングとFD」趣旨	
第2分科会テーマ「教育の質保証とIR」趣旨	
第3分科会テーマ「高大接続・初年次教育・キャリア教育」趣旨	
○第1分科会「アクティブラーニングとFD」	【基盤教育1号館1階 113教室】 6
話題提供1 日英二重言語によるオンライン語学学習交流と英語のみのオンライン語学学習	室蘭工業大学
話題提供2 レディネス多様性に対応するアクティブ・ラーニングによる受講者の変容と指導上の課題	青森県立保健大学
話題提供3 協同学習を取り入れた教養化学の授業展開	酪農学園大学
話題提供4 理系科目におけるアクティブ・ラーニング ―実践例と意識調査―	帯広畜産大学
話題提供5 アクティブラーニング的要素を取り入れた導入教育「スタートアップセミナー」	山形大学
話題提供6 学生主体型授業における共通教育と専門教育の系統性を考える	山形大学
話題提供7 東北大学における学生ボランティア支援と社会貢献型の体験学習プログラム実施の現状と課題	東北大学
○第2分科会「教育の質保証とIR」	【基盤教育1号館2階 124教室】 13
話題提供1 教学IRを視野に入れた「学位授与の方針」の達成度調査の取り組み	岩手大学
話題提供2 教学評価体制の構築へ向けての現状と課題	北海道大学
話題提供3 持続的質保証を目指す山形大学型EMIR	山形大学
話題提供4 参照基準策定の現状と課題 ―物理学分野を例に―	山形大学
○第3分科会「高大接続・初年次教育・キャリア教育」	【基盤教育1号館2階 123教室】 17
話題提供1 2014年度卒業時調査よりみた大学教育の現状と課題 ―初年時教育の重要性―	東北学院大学
話題提供2 初年次教育におけるデートDV予防教育の提案	酪農学園大学
話題提供3 学士課程教育における授業支援ツールの開発と活用	北海道科学大学
話題提供4 学部横断型クラス編成地域学ゼミナールの導入について	弘前大学
話題提供5 医科大学における初年次教育としての「医学セミナー」 ―「一旦は立ち止まること」と「とにかくやってみること」	福島県立医科大学
話題提供6 大学教育とNIE	山形大学
話題提供7 もちアッププログラム	札幌大学
*以下、第2分科会終了後、【基盤教育1号館2階 124教室】にて発表	
話題提供8 今の自分たちに何ができるか ―大学生の今と昔―	東北薬科大学
話題提供9 附属高校内に設置された「獣医進学コース」での野生動物医学の初歩に関する授業事例	酪農学園大学
話題提供10 「就業力養成科目」への取り組み	北翔大学
全体会Ⅱ	27
1. 事例報告「主体的な学びの確立と学士課程教育の質的転換」	
2. 分科会報告	
3. 意見交換／質疑応答	
総会Ⅱ	28
東北・北海道地区大学等高等・共通教育研究会会則	29
総会承認事項	30
開催大学一覧	32
第65回東北・北海道地区大学等高等・共通教育研究会運営組織	33
会場配置図	

○全体テーマ

魅力的な学士課程教育の構築に向けて(趣旨)

東北・北海道地区大学等高等・共通教育研究会(以前は東北・北海道地区大学等一般教育研究会の名称)は、今回で65回目を迎える。本会は1951年(昭和26年)に山形大学で記念すべき第1回が開催された。翌年の第2回も山形大学で開催され、3年目に津軽海峡を渡り北海道大学で開催された。以後、毎年交互に東北と北海道の国立大学で開催され、11回目に山形大学に戻って2順目に入った。17回目には私立大学(東北学院大学)で初めて開催され、これまで6校7回私立大学で、1回公立大学(岩手県立大学)で開催された。65回目の今回から6順目に入ることになる。

全国には、それぞれのブロック(地区)毎に本会与類似の研究会が存在するが、参加大学数・参加人数・発表数を見ても、本会ほど活発に活動している会はないようである。ほとんどの大学教員が生まれる前から存在していた本会に対する先人の営為に敬意を表する。

だが、本会がこれまで順風満帆であったとは到底思えない。本会の誕生期には、計り知れないほどの生みの苦しみがあつたはずであるし、定着するまでには関係者の並々ならぬ尽力があつたことが容易に推察される。そしてこの会のターニングポイントが1991年(平成3年)の「大学設置基準の大綱化」によつてもたらされることになった。教養教育課程の法的縛りがなくなり、全国の大学において、教養部と教養教育の解体が急速に進んでいった。本会の名称が一般教育研究会から高等・共通教育研究会に変更する原因となった。まもなく大綱化から四半世紀が経とうとしている。

大学設置基準の緩和によつて、日本の大学数と進学率は1990年(平成2年)から現在までの間に倍増し、マス段階からユニバーサル段階へと突入した。そのため大学は多様で深刻な問題に直面し、学士課程教育のカリキュラムの抜本的な見直しや授業法の改善を不断に行わざるを得ない状況になった。こうした学士課程教育の改革期にあつて、人間力や社会人基礎力、ジェネリックスキル、初年次教育やキャリア教育、アクティブラーニングなどの新たな時代の要求は、専門教育以外分野、即ち従来の教養教育、現在の全学共通教育に期待され、否応なくその多くを担わされることになった。さらに大学を取り巻く環境は、18歳人口の減少に伴い、多くの大学が学生定員を確保できない深刻な経営上の問題を抱えている。全国レベルから見ても東北・北海道地区は大変厳しい状況にある。

こうした厳しい環境下にあつて、大学が生き残るためにはそれぞれの大学が強みを持たなければならないと喧伝されている。しかし、強さという定量的な力の論理だけでは、到底この厳しい環境下で太刀打ちできない大学もある。我々は強者の論理に取り込まれることなく、それぞれの大学の質的な違いに基づいた魅力を再発見あるいは新たに構築し、それを学生や社会に示していくことが求められている。本研究会の全体テーマは、加盟校の魅力ある学士課程教育を参加者で共有し、磨き上げていくことを願つて設定したものである。

基調講演は山形大学の小田隆治教授による「公開・共有・相互研鑽による大学教育改革ー改革もローマも一日にして成らずー」である。氏が取り組んできたこれまでのFD活動や大学間連携組織「FDネットワーク"つばさ"」、大地連携(大学と地域の連携)などの具体的な話を聞くことができるであろう。

分科会は、1. アクティブラーニングとFD、2. 教育の質保証とIR、3. 高大接続・初年次教育・キャリア教育の3つのテーマを準備した。多くの参加者による話題提供と活発な議論を期待している。

2日目の全体会Ⅱでは、文部科学省の担当者に「主体的な学びの確立と学士課程教育の質的転換」についての講演をお願いした。この講演が各大学のより良い改革のヒントになることを望んでいる。

2018年頃からの長期的な18歳人口の減少による大学入学定員確保の困難さ、いわゆる「2018年問題」は、これからの大学の死活を我々に突き付けている。個々の大学の存亡は、規模のいかに問わず、その大学が存立する地域の維持発展とも深く結びついており、東北・北海道地区の発展のためには、大学はこの「2018年問題」という危機的状況を乗り越えていかなければならない。

6順目の入口である本大会が、各大学の教育の個性的な魅力を引き出し、それを増進し、社会に発信することにつながっていくことを願っている。

総会 | (10:00~10:20)

基盤教育 1号館 2階 122教室



1. 開 会
2. 委員長挨拶
3. 議長選出
4. 庶務・会計報告
5. 会計監査報告
6. 会則改正等について
7. 研究会日程について
8. そ の 他
9. 閉 会

全体会 I

基調講演(10:20~12:00)

基盤教育 1号館 2階 122教室



公開・共有・相互研鑽による大学教育改革 —改革もローマも一日にして成らず—

山形大学教育開発連携支援センター 教授 小田 隆治

1999年(平成11年)の大学設置基準の改定によってFDの努力義務化が開始されたが、その年に山形大学は全学共通教育の教養教育を対象としてFDが始まった。それは教養部の廃止から3年しか経っていない時期だった。この年には、本研究会が山形大学で開催されている。

私は2000年から全学の教養教育研究委員会のメンバーとなって、FDを担当することになった。FDの用語はそれ以前に本研究会で聞きかじっていたが、決して好ましい表現には捉えていなかった。そんな私が現在までFDを担当してこようとは夢にも思っていなかった。こうした私が仲間(教員と職員)と一緒に大学の教育改善の駆動力となるFDのレンガを一つずつ積み重ねていくことになった。時に細心に、時に大胆に。我々は当時日本の大学のFDを牽引していた北海道大学の阿部和厚先生や京都大学の田中毎実先生に教養を請い、かれらが進めていた「FD合宿セミナー」や「公開授業と検討会」を山形大学流にアレンジしていった。同時に、「学生による授業評価」の方法も先進大学の事例に改良を加えて、山形大学で実施した。もちろん学内では激しい抵抗があったが、私は当時のリーダーや同僚、職員に守られて構想を実現させていった。

教育改善や改革を担うFDを進めていくためには理念が必要である。理念なくしては、FDは小手先の技術やアリバイ作りに堕してしまう。京大の田中先生の「相互研修」の思想を基盤として考えたのは、個人の内に留まっていた授業スキルや教育情報を組織の中にオープンにし、それを共有し、教員が互いに切磋琢磨することであった。この「公開・共有・相互研鑽」の理念の下に、「学生

による授業評価」の結果の大々的な公開方法が決まり定着していった。そして、山形大学版の「学生による授業評価」は、山形県内の「地域ネットワークFD"樹氷"」へ、そして北海道から関東までの東日本の大学間連携組織「FDネットワーク"つばさ"」へと共有されていった。

表に山形大学の教養教育(基盤教育)のFDの歩みを簡単にまとめた。ここで挙げているFD活動は着手した年を示しており、そのほとんどをその後毎年開催している。全国の大学のFD担当者から、これほど多くの内容の濃い活動を展開できる秘訣を聞かれることがあるが、それは早期にそれぞれの活動を制度化・マニュアル化できていることによるものである。マニュアル化したものを優秀な事務職員が責任を持って遂行してくれている。この事務職員の役割と能力の高さが山形大学のFDの持続的運営の秘訣である。

いま世間を騒がせているアクティブ・ラーニングについても、我々は15年前から「学生主体型授業」として取り組み、学内そして連携校に定着するように奮闘してきた。さらには2008年に開始した「エリアキャンパスもがみ」での大学と地域が連携した現地体験宿泊型授業を「つばさ」プロジェクトの連携校や連携地域に拡大している。既存の授業のみならず、こうした新しい授業法の開発や定着にもFDが必須である。

FDの成果はと問われることも多いが、大学の教育改革とFDは常に現在進行形であり、道半ばと答えざるを得ない。大学教育改革には、学生主体型ならぬ教員主体性が今真剣に問われている、と感じるのは私だけであろうか。さて、この点についてのFDの成果は如何に……。

表 山形大学の教養(基盤)教育のFDの歩み

西暦(平成)	主要なFD等の開始	文科省採択事業
1999年(11年)	・教養教育FDワークショップ	
2000年(12年)	・学生による授業評価 ・公開授業と検討会	
2001年(13年)	・FD合宿セミナー ・学生主体型授業の研究	
2003年(15年)	・SD研修会	
2004年(16年)	・地域ネットワークFD"樹氷" ・学生FD会議	
2006年(18年)	・エリアキャンパスもがみ	現代GP
2007年(19年)	・個別支援型FD ・ベストティーチャー賞創設	
2008年(20年)	・FDネットワーク"つばさ" ・学生主体型授業開発共有化FDプロジェクト	教育GP
2009年(21年)	・授業改善ビデオ『あっとおどろく大学授業NG集』	
2010年(22年)	・英語版授業改善ビデオ ・授業改善ビデオ『学生主体型授業へのアプローチ』	
2012年(24年)	・東日本広域圏の大学間連携による教育の質保証 ・向上システムの構築("つばさ"プロジェクト)	大学間連携共同教育推進事業

略 歴

氏 名：小田 ^{おだ} ^{たかはる} 隆治

山口県美祢市生まれ

筑波大学大学院博士課程生物科学研究科修了(理学博士)

山形大学地域教育文化学部・副学部長・教授

教育開発連携支援センター・FD部門長

2005～07年 山形大学学長特別補佐

2004～07年 山形県の国公立6大学・短大からなる大学間連携組織「地域ネットワークFD"樹氷"」の議長

2008年 東日本の国公立52大学等からなる大学間連携組織「FDネットワーク"つばさ"」の議長

2008・09年 質の高い大学教育推進事業(教育GP)委員会大学部会第3WG委員

2008・09・12～15年

読売新聞「大学の實力」検討委員

2012年～ 読売光と愛・復興支援大学奨学金選考委員

2004年(現代GP)、2006年(現代GP)、2008年(教育GP)、2012年(大学間連携事業)に採択

2012～15年 大学教育学会常任理事

専門は、生物学、大学教育改革。

著書：『大学職員の力を引き出すスタッフ・ディベロップメント』(2010、単著、ナカニシヤ出版)

『学生主体型授業の冒険2』(2012、編著、ナカニシヤ出版)

『2013、新訂 生物学と生命観』(単著、培風館)他

第1分科会テーマ「アクティブラーニングとFD」

(趣旨)

この分科会では、アクティブラーニングとそれに関係したFDの取組に焦点を当てて、事例の交換と、意見の交流を図ります。

アクティブラーニング(AL)についての説明は、この研究会に参加される方にとってはもはや常識で、実践されている先生方も多いと思います。新聞でもALの記事が教育分野において紹介されることが多く、特に小学校現場での取り組みが中心になっています。タブレット端末を使用した取り組みが多いですが、グループワークを取り入れた取り組みもあり、その形態は様々です。大学においても学生主体型をキーワードに検索すると多くの大学で取り組まれています。FDにおいても、教員の教育方法の改善を目的とするALも行われてきました。山形大学においても教育GPとして3年間、行ってきました。成果はHPをご覧ください。ALで学んできた学生が入学してくることや、学生のよりよい学びの手法として今後高等教育機関でますます増えていくことは明らかです。この分科会では、事例を紹介するとともに、その問題点を認識し、共有していきたいと思います。

(キーワード)

アクティブラーニング・グループワーク・反転授業・ICT・学生主体型授業

第2分科会テーマ「教育の質保証とIR」

(趣旨)

この分科会では英語や理系基礎科目といった科目単位での質保証や教育評価から、学部学科・全学の教学IRにいたる話題を取り扱います。

ステークホルダーの観点から、大学教育の質保証及びアウトカム評価がますます重要になっています。これまで大学教育の充実においては教員個人の努力と裁量に任されてきましたが、教育の質保証を実現していくにあたって科目内での教育内容・教育評価の相対性を意識し教育改善のための協働を実施していく、といった教員個人を超えた取り組みが必要になります。

さらに、質保証をディプロマ・ポリシーの側から考えたとき、学生の入学前から入試、在学中・卒業後の動向を統合的にアウトカム分析しカリキュラム改善に生かしていくIRは不可欠ですが、実践と経験の蓄積といった面では各大学において端緒についたばかりです。

語学・理系基礎科目・大学導入科目といった科目単位での質保証の取組み、学部学科から全学単位での教学IRによる実践まで広範囲の話題提供をお願いいたします。

(キーワード)

質保証・IR・FD・アウトカム・入試

第3分科会テーマ「高大接続・初年次教育・キャリア教育」

(趣旨)

この分科会では、高大接続、初年次教育、キャリア教育の取組みに焦点を当てて、事例の交換と、意見の交流を図ります。

昨年末に出された中教審答申以後、高大接続の問題は、改めて多くの大学人の関心を集めています。関心の的はなにより、予告されている新テストを踏まえた大学入試の形にありますが、あいにく、現時点では新テストの具体的な形態は明らかでないこともあり、入試の具体的な形態については、まだ踏み込んだ取り組みが難しい状況でもあります。そこで、本分科会では、少し視野を広げて、高校から大学へ、また大学から社会へという流れに沿い、「初年次教育」、「キャリア教育」という2つのキーワードをつけ加えてみました。入学後の初年次教育の形態や、卒業後を見越したキャリア教育の取組み、それ自体として重要なテーマであると同時に、高大接続の問題について考える際の枠組みを明瞭化する上でも資するところがあるのではないかと期待しています。

(キーワード)

高大接続・初年次教育・キャリア教育・入試・補習教育